

「趣味の旅行」と「モダン・ライフ」

—大正・昭和前期における旅行文化の展開と旅行論—

赤井 正二*

本稿の目的は、大正時代から昭和前期にかけての時期における旅行の多様化と大衆化の実態を概観しつつ、旅行のこの展開を背景として生み出された旅行の効用や文化的意味に関する代表的な小論を分析することによって、「旅行」という行為がどのように理解されたのか、また大衆化した旅行にどのような問題点と文化的可能性が見いだされたのかを明らかにすることである。第一に、旅行の大衆化と旅行の多様化とは不可分であるが、「趣味の旅行」として一般的に特徴づけられた旅行の多様な内容と形態について分析し、第二に、旅行の効用や社会的機能についての各種の小論からとくに、権田保之助の議論をとりあげ、その視点の特質について考える。第三に、「趣味の旅行」の内容に関連して、三木清による一種のユートピア経験としての旅行の位置づけと、そのような旅行スタイルの典型として古都奈良への和辻哲郎の旅行をとりあげる。第四に、大衆的な観光旅行に対する柳田國男の両義的な問題意識をとりあげ、全体として大衆化した旅行が文化としてもっている可能性について考える。

キーワード：趣味の旅行、権田保之助、三木清、和辻哲郎、柳田國男

はじめに

信仰のためという理由づけを必要としなくなるところから始まる近代の旅行文化の史的発展は、D. プーアスティンを典型とするように、能動的で危険をはらんだ濃密な経験を求める「旅行者 (traveler)」から受動的で日常生活的な快適環境において人為的に作り出されたアトラクションを楽しむにすぎない希薄な経験で満足する「観光客 (tourist)」へという旅行者類型の変動として分析されることが多い。

「旅行の便宜が増大し、改善され、安価になるにつれて、ますます多くの人々が遠くへ旅行するようになった。しかし目的地へ行くまでの経験、そこでの滞在の経験、そしてそこから持ち帰って来るものは、昔とはまったく異なってしまった。経験は希薄化され、仕掛けられたものになってしまった」¹⁾。

この分析枠組みは旅行者数の増加といった社会現象の実証的な側面に着目しているだけでなく、「能動的なエリート旅行者から受動的な大衆観光客へ」という社会階層上の変動と、さらにまた、この変動を「旅行術の喪失 (the lost art of travel)」や退歩と評価する価値的な判断をも伴っている。

* 立命館大学産業社会学部教授

こうした旅行文化の変化についての批評をエリート主義的なものとして退けることもできるし、またこれらを旅行経験と旅行類型の研究の一つとして位置づけて、それを踏まえて新たな旅行経験と旅行類型研究の展開を目指す試みも多様にある²⁾が、少なくともかつての旅を優れたものとし、現代の観光を劣ったものと評価する立場は社会文化現象の分析としては不十分であることは明らかであろう。「退歩」であるものが多くの人を惹きつける力をもつはずもなく、旅行文化の普及は旅行文化の退歩や旅行経験の希薄化として旅行者自身に意識された訳でもないはずであって、まずは旅行者自身の視点に即した希望や期待の内容を分析することが重要だと思われる。

本稿の目的は、近代の旅行文化の史的発展についての旅行者と旅行文化内在的な視角を拓くことであり、そのために、大正時代から昭和前期にかけての時期における旅行の多様化と大衆化の実態を概観しつつ、旅行のこの展開を背景として生み出された旅行の効用や文化的意味に関する代表的な小論を分析することによって、「旅行者」という主体がどのように理解され、大衆化した旅行にどのような問題と文化的可能性が見いだされたのかを明らかにしたい。第一に、旅行の大衆化と旅行の多様化とは不可分であるが、「趣味の旅行」として一般的に特徴づけられた旅行の多様な内容と形態について分析し、第二に、旅行の効能や社会的機能についての各種の小論からとくに、権田保之助の議論をとりあげ、その視点の特質について考える。第三に、「趣味の旅行」の内容に関連して、三木清による一種のユートピア経験としての旅行の位置づけと、そのような旅行スタイルの典型として古都奈良への和辻哲郎の旅行をとりあげる。

第四に、大衆的な観光旅行に対する柳田國男の両義的な問題意識をとりあげ、全体として大衆化した旅行が文化としてもっている可能性について考える。

1. 「趣味の旅行」と旅行の形の多様化

大正末から昭和初期にかけての時期は、旅行の大衆化が急速に進行する時期であったが、それは鉄道をはじめとして宿泊や情報等の国内旅行を支える制度や組織の整備と相互に関係することによるものであった。国有鉄道は1913年（大正2年）の「欧亜連絡鉄道線路」開通に象徴されるように、「大正末期から昭和十年に至る殷賑」に至り、「東洋の天地では比肩するものなき近代的大鉄道として発達した」³⁾。1924年（大正13年）には、大正期の登山ブームを背景とした日本旅行文化協会（1926年（大正15年）日本旅行協会に名称変更）が設立され、雑誌『旅』や時刻表、各種ガイドブックなどの出版物によって旅行情報が整備された。また1912年（明治45年）に外客誘致を目的として設立されたジャパン・ツーリスト・ビューローは、1927年（昭和2年）に任意法人から公益社団法人へと性格を変え、切符の代売りなど国内旅行斡旋の分野にも事業を拡大した。1929年（昭和4年）には温泉の保護と開発を主旨とした日本温泉協会⁴⁾が設立され、1934年（昭和9年）にはジャパン・ツーリスト・ビューローと日本旅行協会が統合して、総合的な旅行斡旋機関が誕生することになる。また1936年（昭和11年）各地の観光協会、保勝会などを土台として観光連盟が結成された。さらに観光資源保護の点では、1919年（大正8年）に史蹟名勝天然記念物保存法が公布され、史蹟や名勝や天然記念物の保存

の取り組みが進み、1934年(昭和9年)から1936年(昭和11年)には、アメリカの国立公園をモデルとして、阿寒、大雪山、十和田、日光、富士箱根、中部山岳、吉野熊野、大山、瀬戸内海、阿蘇、雲仙、霜島の12カ所が国立公園として指定され、観光資源の整備に手がつけられた。

こうした社会的な条件の整備を促したそれに促され、旅行は文化的行動として多彩に展開していくのだが、この点では、日本旅行協会とジャパン・ツーリスト・ビューローの果たした役割は大きく、スキー・スケートのウィンター・スポーツ、登山、ハイキング、避暑、団体旅行、月掛旅行、新婚旅行、女性の一人旅など「諸種の旅行の新形式を続々と紹介して、本邦旅行界をしばしばリードした」⁵⁾。

大正末から昭和初期にかけての旅行のスタイルの変化が「山水の旅から趣味の旅へ」という変化としてまとめられるのは、例えば次のような文献においてである。『日本交通公社七十年史』では、「昭和に入って、旅行の快適さが進むとともに、大衆の旅行熱は高まっていった。また同時に、大正の「山水」の探勝だけでなく、史蹟、古美術、民俗、伝説、天然記念物さらには民謡、民芸といった趣味の旅の要素が加わる」⁶⁾として、大正期の「山水ブーム」と昭和初期の「趣味の旅」をそれぞれの時期の特徴としている。また澤壽次、瀬沼茂樹著『旅行100年—駕籠から新幹線まで—』でもこの時期の変化について、「山水の旅から趣味の旅へ」⁷⁾というまとめ方をしている⁸⁾。

「趣味の旅」という表現は、「山水の旅」と同様に、とりあえずは出版物のタイトルに見られるものである。旅行が大衆化するに伴って、田山花袋『温泉めぐり』1917年(大正6年)などの山水美以外のテーマを扱った出版物が数多く

発行されるようになる。また公式ガイドブック的な位置をもつ鉄道省編のガイドブックでは、大正8年『神まうで』(全国有名神社案内)、昭和6年『お寺まわり』をはじめとして、スキー、登山、温泉をテーマにしたガイドブックが出版され、それらを踏まえて総合的なガイドブックである『日本案内記』全八巻が、昭和4年の東北編から、同5年関東編、同6年中部編、同7年近畿編上、同8年近畿編下、同9年中国・四国編、同10年九州編と順次刊行され、昭和11年の北海道編をもって完結した。こうして「案内記」というタイトルとは別に、民間出版社である博文館から、大正8年より多様なテーマの旅行を扱った出版物が「趣味の旅シリーズ」として刊行された。大正8年 笹川臨風著『古跡めぐり』、昭和2年 藤澤衛彦著『傳説をたづねて』、松川二郎著『不思議をたづねて』、松川二郎著『名物をたづねて』、松川二郎著『民謡をたづねて』、昭和3年 近藤福太郎『川柳をたづねて』、昭和5年 齊藤隆三著『古社寺をたづねて』などである。

これらの出版物のタイトルから分かるように「趣味の旅」とは、具体的には、山水美探勝の登山といった特定のテーマだけでなく、神社仏閣や名所旧跡、地方料理、民謡、温泉、さらには地理的知識、自然科学的知識⁹⁾などをテーマとした旅行を総称するものである。この際、とりあえず「趣味」という言葉が、hobbyの意味ではなく、tasteの意味で理解されていることに注意しておきたい。

「趣味の旅」という本のタイトルの背景にある旅行の多様な展開は具体的にはどのようなものであったのだろうか。松川二郎は「わが国最初のプロの旅行作家」、「趣味の旅を普及させた功労者」¹⁰⁾と目される作家であるが、例えば、

彼の『珍味を求めて舌が旅をする』では旅の楽しみの要素が次のようにまとめられている。

「異った土地へ行って異った物を食うということは、確かに愉快的なことだ。旅の面白味の一半はここにある。「宿屋についたら早速名物の○○節をきき△△踊を見て、名物の××を食ってやろう」という期待は、何代目かの何とかの松を見たり、古びた石の一片である何某の墓を訪れるよりも、確かに、少なくとも、私に取っては愉快的期待であるのである。ましてや名物にも時々ほうまい物があるから、到底旅は止められない。例えば、駅で売る汽車弁当にさえ私は一種の興味を感じず。…」¹¹⁾

各地の民謡が旅の楽しみの一つとなった背景には、もちろん大正末から昭和にかけての民謡ブームがある。蓄音機、レコード、ラジオの普及、さらに鉄道網の発展による人の移動の活性化を背景として、一方での、地方の伝統的な民謡の普及と、他方での、北原白秋、野口雨情、西条八十らの創作運動である「新民謡運動」とが交錯して、～節、～小唄、～音頭といった民謡が地方の観光振興と深く結びついて広がった¹²⁾。

昭和8-9年に駅に備え付けられたスタンプを蒐集することが旅行者の間で流行し、雑誌に各駅のスタンプの紹介や批評の記事が掲載されたり、交換会が行われたり、スタンプを貼り付けるスタンプ帖が発売されたりした。駅スタンプの蒐集が旅行の楽しみのひとつとなった¹³⁾。

大正時代中期の登山ブームを背景とし、「健全な旅行趣味の育成」を一つの目的として掲げる日本旅行文化協会¹⁴⁾が1924年（大正13年）に発足することも考え合わせれば、「趣味の旅行」と「旅行趣味」はともに多くの国民が参加できる拡がりをもった新たな文化としての旅行の在

り方を示す言葉であったのであり、主たる目的の自由な選択に基づく旅行であるところに共通の特性がある。この場合に限れば、「趣味(taste)」という用語のもっとも重要な含意は「個人の選択」であり、「趣味の旅行」は、信仰など社会的伝統・権威や職業ないし地位などの社会的属性に拘束されず、自由選択に基づく旅行なのであり、したがって個人の新奇性への欲求、冒険心、開拓心、教養や知性などが重要な要素となる。

日本旅行協会および日本旅行倶楽部発行の雑誌『旅』はしばしば読者アンケートの結果を掲載しているが、これは旅行の個人選択性と並行するもう一つの別の傾向を示している。つまり、旅行の年中行事化という形をとった自己目的化ないし目的の抽象化である。

次の表は、戦前の雑誌『旅』の目次の内、一つの表題について複数の寄稿のある記事のうち比較的寄稿者の多い記事のリストである。

このようなアンケートは、旅行には多様な理由づけが可能になっていることを示している。こうした問いと回答から次の二つのことを読み取りたい。第一は、多様化し大衆化した旅行が季節によって特徴づけられ、いわば社会的に認められた伝統的な年中行事の形をとっていることである。もとより季節の行楽は長い伝統のある楽しみであり、比較的長距離の旅行もまたこの季節の「行楽」の文脈の中に組み込まれている。「真夏の旅の印象」「正月の旅行」「桜の名所」「人に薦めたい温泉地と旅館」「印象に残る紅葉境」「冬の旅行先」「郊外散歩」、このように問われている旅行は距離の遠近を問題にはしていない。

第二に、場所やテーマはまったく選択の問題となったことである。まず季節ごとの旅行とい

雑誌『旅』主要誌上アンケート

掲載年月	アンケート項目	回答掲載者数
1924年(大正13年)7月	山の思い出・海の思い出	19人
1924年(大正13年)8月	真夏の旅の印象	20人
1924年(大正13年)12月	天龍川下り感想	12人
1925年(大正14年)1月-2月	宿屋についての感想	37人+29人
1925年(大正14年)3月-12月	旅客から・旅館から(宿屋研究の一～十)	合計 118人+52旅館
1927年(昭和2年)1月	正月三日間三十円旅行	58人
1927年(昭和2年)6月-8月	夏の旅行地として何処がよかったか、何処へゆきたいか	145人
1932年(昭和7年)7月	我が郷土の山を讚う	43人
1933年(昭和8年)2月	温泉一人一話	16人
1934年(昭和9年)1月	正月は何処へご旅行になりますか、あなたのお好きな地方民謡及び其の歌詞の一節をお知らせ下さい	57人
1934年(昭和9年)4月	ご覧になった桜の名所で何処が良いとお思いですか、桜に因む詩歌で好きなものをお知らせ下さい	40人
1935年(昭和10年)3月-5月	推薦旅行文庫	39人
1935年(昭和10年)4月-9月	旅の感覚	4月7人 5月6人 6月13人 8月9人 9月13人
1935年(昭和10年)5月	人に薦めたい温泉地と旅館	10人 往復はがき名士回答 10人
1935年(昭和10年)8月	住み良いところ・御回答賜り度候	34人
	日米親善人形使節の旅	14人
1935年(昭和10年)10月	印象に残る紅葉境	36人
	旅の同伴者	10人
1935年(昭和10年)12月	スキーがスキになった話	23人
	この冬はこんなところに	17人
1936年(昭和11年)3月	富士山にケーブルカー架設の可否	20人
1936年(昭和11年)3月-5月	婦人のページ	22人
1937年(昭和12年)4月	郊外散歩辞典 三都中心	24人
1937年(昭和12年)8月	気に入った夏の旅行地	18人
1938年(昭和13年)6月	感心した旅行公德	10人
1938年(昭和13年)12月	旅行質疑応答見本	12人

う枠があり、次に旅行先が選択される。いわば旅行は自己目的化されている。「正月三日間三十円旅行」「夏の旅行地として何処がよかったか、何処へゆきたいか」は、旅行に出かけること自体が主目的となっていることを示している。多様な形の「趣味の旅」は「自己目的としての旅行」を基底にもっている。

交通機関網の整備と安全性の確保という基礎条件の成熟によって、「旅」は、そこに多様な意

味や目的を盛り込むことのできる器になった。つまり、芸術が宗教的権威と政治的権威から自立したのと同じように、特定の目的、特に宗教的目的から自由な文化形式となった。と同時に「旅の新しい内容」を盛り込むことのできる「旅の新しい形式」を不断に発見し続けることが文化の課題となった。

「山水の旅から趣味の旅へ」という変容は、山岳登山、またそれ以前の聖地巡礼旅行という

特定の旅行形態が、さまざまな選択肢をもつ多様な旅行形態に展開・拡散する過程に他ならない。「趣味の旅行」は、旅行が一生に幾度とない稀な出来事ではなく、現代の普通の生活にとって珍しくない行動に変容していく際の、旅行の形であると言える。多くの人が実際にどの程度旅行の楽しみを享受できたかは別として、少なくとも話題や希望としては通常のものとなるような段階に達した時に、旅行は途方もない贅沢や無謀な冒険ではなく「趣味」という流行のキーワードを伴って定着した。選択肢が多様化することによって「旅行の日常化」がもたらされたと同時に、「旅行の日常化」が多様な選択肢を必要としたのである。

では特定の内容との結びつきから解放された「旅行そのもの」とはどのようなものであり、人間生活にとってどのような意味をもつのだろうか。贅沢やわがままや無駄でないのだとしたら、「旅行のための旅行」はどのような側面で社会的に認められるのであろうか。一部の漂泊者にとっての意味ではなく、多くの人々にとっての意味が見出されなくてはならなかった。「趣味の旅行」の多様な拡がりの反面で、「旅行そのもの」を解釈する様々な「旅行論」が生み出された。

2. モダン・ライフと観光旅行

個人の選択による新しい旅行形態は、それが習慣としてまだ定着していない社会では、理由づけが必要である。それは「何のための旅行」なのかという問いに答えなければ社会的に普及することはできない。自己目的としての旅行であっても、現代社会との関係において何かしらの意味を発見できなければならない。自由な選

択が可能になった旅行は、現代の生活にとって、どのような意味をもっているのだろうか、雑誌『旅』には多くの小さな旅行論が見られるが、それらは多かれ少なかれ、このような問いに対するさまざまな回答を含んでいる。

雑誌『旅』の旅行論には、現代の旅行の安易さに違和感を示し、例えば徒歩による旅行によってその土地の歴史や実情を理解することこそ真の旅の趣なのだといった、意見も多く見られる¹⁵⁾。しかし逆に、多くの論考は、少なくとも主たる動機においては、近代的都市生活と旅行との差異や異質性に注目して、現代の旅行を位置づけている。以下、興味深い指摘を挙げてみたい。

「人生に希望を懐く潑瀾たる生活者にはただ活動があるのみだ。しかも人間に取ってある期間内の休息は睡眠と同様に絶対的に必要である。…休息の最も意義あり、趣味あり、浩然の氣を養って、更に以前に倍する生活力を以て人生にぶつかって行く原動力をなすものは何と言っても言ふまでもなく旅行だ。旅行は大自然を味ふことだ。宇宙を知ることだ。人間の生活の意義を知ることだ。吾等はかくの如き旅行を望む」¹⁶⁾。

「全く現代のやうな、都市生活をやってみては、旅は十二分にすぐれた救ひであり、生命の洗濯であることが出来る。／だから現代人、とりわけ都市人は旅を愛するのだ。幾年も幾ヶ月もかゝるやうな大旅行は、極めて少数者にのみ可能なことで大多数の都市人にはのぞめないことではあるが、しかし一泊二泊の又は日歸りの小旅行なら一般民衆にも出来るのだ。／都塵に汚れた魂を清めに出かけてゆく一二泊乃至日歸りの旅客達をわれへは如何にしばへ土曜日日曜日の郊外電車の中に

見かけることか。／彼等のその時の顔が、目付きが、如何に生々と喜びに輝いてゐるか。／旅は現代都市人にとって何のものにも優る藝術なのだ。こゝに来るとラヂオも映畫もものゝ數でない。それ等はたゞ彼等の疲れた心に一時的な刺激をあたへて呉れるにすぎない。そしてその結果は、一層に彼等の魂を疲れさせるだけだ。／然るに旅は、彼等のその疲れたこゝろに、清新なる風を入れて呉れる。…現代に於いて、旅とは樂園の別名である。この世に於ける極樂である。…旅の楽しみなるものは、藝術としての旅なるものは、極めて近世的な、むしろ現代的なものにすぎない」¹⁷⁾。

「旅ほど自分の心を朗かにし、愉快にし、力強くし、憂鬱にし、寂しくするものはない。…この俗世間の真中で無意味に、慣習的にだらへに送つてゐるより、どれほどの生活らしいもの、生きてゐるものを味ふか解からない。…目まぐるしい都會生活の現實苦の中で喘へいでゐるものに、清々して更生の力を與へるものは旅だ」¹⁸⁾。

「舗装された道路を、夏の太陽がキラキラと焼きつくように照り返している。堪えられぬ暑さだ。…この暑さでは都會の人々、——旅なれぬ者までも遠く熱鬧の地を離れた山や海へと追いやられて了う、だが、その追いやられた土地——海でもいい、山でもいい——某処で、この一と夏或いは僅か一日でも、弾き出した余暇を暑熱から遠ざかって心ゆく迄涼を入れる事が出来たら、大自然に、つきめされて逃げ出した吾々ではあるが、却って自然を征服していることになりはしないだろうか」¹⁹⁾。

「現代に於いては旅行は一の趣味にまで進化し又昔時の修行とは別な意味に於いて、教育乃至教養の重要な一要素たるに至った」²⁰⁾。

「今日のように書籍と機械の間で、日々生命を摩滅しつつある都會人には、その歩行の天恵さえも十分に与えられない。…田舎から都會に移住して、一、二年も経過すると、電気に対する興奮性が高まってくる。そんな実験は伯林でも行われていた。實際都會人は明敏といはんよりは、寧ろ慥かに神経衰弱に陥っているのである。／だから身体は菲弱に、思想は悪化する。之を救済する上策は事情の許す限り、都會を離るることである」²¹⁾。

これらは個々の筆者の個々の指摘にとどまるものではなく、大都市生活との関連で現代の旅行の必要性や在り方を論じるのは、都市生活者を主たる読者としたこの雑誌の基調であるとさえ言える。文人的な旅から都市生活者の旅行へ、この時代の旅行者像はこのような変化の中にあつたのであり、都市生活者の旅行の意義はまずもって、都市生活そのものとの関係で機能的にとらえられることになる。

『民衆娛樂問題』(1921年)、『民衆娛樂論』(1931年)、『国民娛樂の問題』(1941年)、これらのいずれにおいても、権田保之助は、旅行についてまとまった考察を行うことはなかったが、「健全娛樂としての旅行」²²⁾と題された小論において、旅行の意義を現代生活との関係の中で分析している。「健全娛樂」という用語に現れているように、この論考は戦時体制色が強まる時代背景とともに理解されるべきであるが、「娛樂」を「モダン生活」との関係においてとらえる方法は、『民衆娛樂論』などから一貫している。

旅行が「健全娛樂」であり得る可能性と条件を論じるのが権田の論文の主たる課題であるが、それに先だって、少し前までは旅行は「健全娛樂どころか、娛樂としてさえも考えられて

はいなかったという事実」を踏まえて、彼は「旅行の文明史」あるいは「旅行の史観」を簡潔にまとめている。

権田の「旅行の文明史」は、次のような三段階によって構成される。

まず第一は前近代の旅行であり、交通機関が未発達であることと旅宿が不完全であることに大きな特徴があり、その結果として予定というものを立てることが出来ず、費用と時間の点で「不合理な浪費」を余儀なくされた。この時期には、ごく少数の例外はあったとしても、「健全娯楽としての旅行とは此の時代に於いてはなお縁遠い概念」であるほかなかった。権田の「旅行史観」にとって「東海道中膝栗毛」の旅行や「伊勢参り」は甚だ特殊な事例なのである。

第二段階としての近代の旅行は、まずもって交通機関の発達と旅宿などの交通制度全般の改善によって特徴づけられ、これらによって旅行の苦労は著しく軽減され、時間の短縮と正確さによって、前近代の旅行にみられた不確実性は縮減された。その結果、「旅行を以て人生の行路難に比した考へ方は消え失せてしまった」²³⁾。旅行は恐ろしいものでも危険なものでもなくなり、「一個凡庸なる日常の行事の一つ」へと変容したのである。「旅を楽しむ趣味」が出現し、生活の中に娯楽として旅行が取り入れられることが始まったのであるが、それを享受できたのは国民の一部、とくに「少数富者と學生」に過ぎなかった。このような一部の者の娯楽にとどまったのはもちろん時間的余裕と費用によるものであったが、権田は、注目すべき要因として次のことを指摘している。

「これは（旅行を娯楽として感じ且つ楽しみ得た者が少数富者と學生とに限定されていたこと…引

用者）主として時間と費用との點にその原因があったのであるが、旅行の爲めの設備、旅行の爲めの機会が尙未だ國民一般に旅行の娯樂性を認め且つ味はしむべく十分でなかった事も忘るゝ事の出来ぬ原因であると思ふ」²⁴⁾。

つまり、國民一般が旅行の娯樂性を承認していなかったことも旅行趣味が少数者に限定されていた要因の一つなのであり、旅行の設備と機会が不十分であったことがその國民の旅行意識の限界を規定していたと分析しているのである。従って近代初頭の旅行は、國民一般にとっては「特權的なもの」であり、「一種の贅澤として、一種の奢侈的表現」であり、「健全娯楽としての旅行」という観念は成立してはいなかった。

第三段階としての現代にいたってはじめて娯楽としての旅行が國民生活一般のなかに位置づけられるようになった。「旅行を其の生活享受の一部」とする考え方が普及し、それによって旅行と「國民一般の生活との吻合」が成立し、「旅行娯樂性の普遍妥當化」が出現した。「旅行娯樂性の普遍妥當化」とはどのようなことなのであろうか。権田の旅行史観とくに近代の旅行の分析が國民的な旅行意識に重点を置いていたことを考え合わせるならば、「旅行娯樂性の普遍妥當化」とは、旅行が「贅沢」でも「奢侈」でもなく正当な娯楽として、言い換えれば文化的行動としての旅行という意味での「旅行文化」として一般に承認されることに他ならないであろう。そして権田はこのような意味での「旅行文化」の成立が、「旅行の健全娯樂性の完成に對する基礎的條件」であるとするのである²⁵⁾。

こうした旅行の歴史的な発展を踏まえて、「旅行の健全娯樂性を構成する要素」、つまり健全な娯樂であるために旅行が果たすべき機能と

して、(1)「体位向上性」、(2)「精神作興性」(3)「知見拡大性」(4)「協同心涵養性」という四つの機能が挙げられる。この中でも権田は「精神作興性」をもっとも重視し、「旅行が有する性質の最も輝かしき側面と称すべき」と位置づけている。また、(1)「旅行施設の改善と完備」、(2)「旅行に対する指導」、(3)「国民旅行の組織体制化」を政策的課題として提起する。「旅行に対する指導」は、旅行に関する情報提供と旅行道徳の涵養を内容としており、「国民旅行の組織体制化」は明らかにナチス政権下での「歓喜力行団 (Kraft durch Freude) の「休暇・旅行・周遊局 (Amt für Urlaub, Reisen und Wandern) をモデルとしている²⁶⁾。

この論文では、旅行の歴史的発展についての立ち入った分析、特に「旅行娯楽性の普遍妥當化」ないし「国民一般の生活との吻合」という現代的段階の分析についての考察は「一切を省略」されているが、1941年(昭和16年)の『国民娯楽の問題』においては、「娯楽の健全性」についてのより一般的な分析が、旅行を含む娯楽と現代生活との結合という視点から行われていることに注目したい。

権田は、「娯楽と云へば、人は直ちにチャンバラの映画を考え、低俗な漫才を思い、女剣戟を想起し、エノケン、ロッパを挙げ、浪花節を算え、歌謡曲を指し、カフェーを拉して来る」ほどに、「世人の多くは娯楽に対して臆断に満ちた予備概念を懐いている²⁷⁾」が、このような先入観をもってしては人間生活・国民生活と娯楽との健全な関係を見出し発展させることはできないとして、生活と娯楽との関係の「健全性」を次のような三つの点で規定する。

第一に、現代人の疲労消耗を回復し「心身に積極的創造的な作用を賦括する」ことであ

り、次のように指摘する。

「現代に於ける勤労と生活とを組織する機構の圧力は現代の生活者の心身に消極的破壊的な影響を齎らすものであって、現代人は此の疲労消耗を回復してよりよき明日への建設に邁進するに非ざれば、到底時代の落伍者たるの運命を免るる訳には行かない。而して其処に現代生活者の心身に積極的創造的な作用を賦括するもの、実に此の娯楽の健全性であると言わねばならぬ²⁸⁾。

第二に、生活の「快い諧調」「調子を整える」事である。

「以上の如き生活に由来する消極面を除去し、其の損耗を償却することによって、^{わず}纔かに欠損を免れ得た現代生活者の生活は、更らに進んで其の生活の全体に快い諧調を取り入れしむる事によって、其の生活全体の調子を有機的に整えて来る要があるが、国民大衆の生活に於て斯くの如きを所期し得んが為めには、娯楽を措いて他に勝れるものを見出だし得ざる事を承認せざるを得ない。即ち現代国民大衆の心身の平衡、生活の整調の爲めの要因としての娯楽の健全性が此処に存するのである²⁹⁾。

第三は、「心身の昂揚」である。

「然かも現代生活者は更らに此処に一步を進めて心身の昂揚を所期せねばならぬのであるが、此の現代の国民大衆の智能を啓培し、情操を陶冶し、人格を完成せしむると共に、其の体位を向上せしむる能力を兼ね備えているもの又此の娯楽の右に出ざるものあるに接しないのである。かくて私達は其処に娯楽が有する健全性の最も高き要因に当面する³⁰⁾。

「疲労消耗を回復」し、「心身の平衡」と「生活の整調」を作り出し、心身を「昂揚」させるものが必要であるのは、「現代生活」が絶えず「現代に於ける勤労と生活とを組織する機構の

圧力」に慢性的に晒されているからに他ならない。

こうした娯楽の「健全性」論が、先に述べたように、戦時体制下での制限された議論の影響を受けていることは明らかであるが、この議論が踏まえている「現代生活」についての分析は、初期の「民衆娯楽」についての研究において見出された「モダン・ライフ」と同質のものであることは見逃されるべきではない。「モダン・ライフ」も「現代生活」も、「近代的大都市といふ怪物の所産」³¹⁾なのである。そして、権田にとって、このような現代生活から必然的に生み出される人間的な必要性を実現する力を、旅行は孕んでいるのである。しかし、このような旅行の力が旅行のどのような特性に由来するのかについては権田の分析に回答を見出すことはできない。彼の議論においては、旅行は常に娯楽の一種として位置づけられているので、旅行そのものの特質については問題とならないのである。

3. 教養としての旅行

現代の旅行についての権田のアプローチは、都市生活との関係で旅行がもちうる社会的効用についての分析であり、その機能は、「疲労消耗の回復」「心身の平衡」「生活の整調」「心身の昂揚」にまとめられる。しかし、これらの機能をなぜ旅行が果たしうるのだろうか。日常生活の行動と旅行とを区別するものは何なのだろうか。こうした面からアプローチする旅行論、旅行を自己目的的活動と見なす旅行論、従って旅行を一種の芸術活動と見なす考え方に、このような問いへの回答を見出すことが出来る。

旅行が芸術と似た面をもつことについて、例

えば、詩人生田春月は次のように述べている。

「君たちはなぜそんなに旅をするのだね？」／かう問はれても、私は旅が好だからとしか答へる事は出来ない。それほど私たちの旅は自己目的である。旅行家にとっては、旅はそれ自身が目的なので、他に功利的目的があるわけではない。…商用ならばとにかく、普通の旅行は生産ではなくして消費である。その意味で藝術に似てゐる。旅を單なる気散じにすぎぬと思ふのは、藝術を娯楽にすぎぬと思ふやうなもの。いづれもそれ以上、教訓を與へ、生活開展に資するのだ」³²⁾。

芸術的行為に引き寄せた旅行の理解は、三木清の『人生論ノート』（1941年、昭和16）に収められている「旅について」にも見られる。それは旅行の機能や効用ではなく、具体的な社会そのものを相対化する能力を可能にすることに旅行の真の意味を見いだす分析であった。

この小論は、旅に普遍的に備わる感情の分析を進めながら旅と人生を重ね合わせることに主眼があり、旅行論としては複雑であるが、本稿の文脈で重要なのは次の三つの指摘である。

第一に、旅行にとっては日常生活との差異が本質的であり、実際的な距離の長短にかかわらず、「旅を旅にする」ものは、現実世界からの精神的距離を作り出す想像力、一つの世界の中にある別の世界を作り出す想像力に他ならない。想像力の所産であるような一つの世界という意味で、旅は人生のユートピアなのである。

「毎日遠方から汽車で事務所へ通勤してゐる者であつても、彼はこの種の遠さを感じないであらう。ところがたとひそれよりも短い距離であつても、一日彼が旅に出るとなると、彼はその遠さを

味ふのである。旅の心は遥かであり、この遥けさが旅を旅にするのである。…旅の面白さの半ばはかやうにして想像力の作り出すものである。旅は人生のユートピアであるとさへいふことができるであらう³³⁾。

第二に、旅もまた一つの行為であるが、日常生活の行為との決定的な差異は、観照的態度が旅行という行為の主要な内容であることにある。想像力によって作り出された世界の中で旅行者は、具体的なものや個別的なもの、必要性から離れることができる。

「日常生活において我々はつねに主として到達点を、結果のみ問題にしてゐる、これが行動とか実践とかいふものの本性である。しかるに旅は本質的に観想的である。旅において我々はつねに見る人である。平生の實踐的生活から脱け出して純粹に観想的になり得るといふことが旅の特色である。旅が人生に對して有する意義もそこから考へることができるであらう³⁴⁾。

第三に、日常世界から脱却することの意味は非日常性に入り込むと言うよりも、日常性に對する別の視角を獲得することにある。旅行においてすべてが既知から未知に轉換し、すべてに對して自由な視角が可能となる。

「旅は習慣的になつた生活形式から脱け出ることであり、かやうにして我々は多かれ少かれ新しくなつた眼をもつて物を見ることができるようになつてをり、そのためにまた我々は物において多かれ少かれ新しいものを發見することができるやうになつてゐる。平生見慣れたものも旅においては目新しく感じられるのがつねである。旅の利益は

單に全く見たことのない物を初めて見ることにあるのでなく、——全く新しいといひ得るものが世の中にあるであらうか——むしろ平素自明のもの、既知のものやうに考へてゐたものに驚異を感じ、新たに見直すところにある。我々の日常生活は行動的であつて到着点或ひは結果にのみ關心し、その他のもの、途中のもの、過程は、既知のもの如く前提されてゐる。毎日習慣的に通勤してゐる者は、その日家を出て事務所に來までの間に、彼が何を爲し、何に會つたかを恐らく想ひ起すことができないであらう。しかるに旅においては我々は純粹に観想的になることができる。旅する者は爲す者でなくて見る人である。かやうに純粹に観想的になることによつて、平生既知のもの、自明のもの前提してゐたものに對して我々は新たに驚異を覺え、或ひは好奇心を感じる。旅が經驗であり、教育であるのも、これに依るのである³⁵⁾。

日常生活から意識の上で離れ、現実世界を日新しい未知の世界に變換し、驚きと自由な想像力をもつてこれに向き合い、そこから何事かを学び、理解する、このような旅行が三木の描く旅行なのである。しかしこのような旅行が、たとえ教養をそなえた一部の知識人にのみ許された旅行であつたとしても、それはどのような社会文化的な意味をもちうるのだろうか。以下、教養ないし趣味としての旅行の典型である和辻哲郎の『古寺巡礼』をモデルとしてこの点について考えてみたい。

「趣味の旅行」という新しいタイプの旅行を切り開いた一つの旅は『古寺巡礼』(初版、1919年、大正8年)である。この本が長く、現在でも一種の観光案内の役割を果たしたことは著者自身も指摘するところである³⁶⁾。

本書の成り立ちはやや複雑³⁷⁾であるが、基本は、大正七年五月に行われた奈良旅行の旅行記の形を取っている。

まず和辻のこの旅行自体が近代の観光旅行の實質をそなえていることに注目したい。この旅行は移動には鉄道と人力車を利用し、宿泊には西洋式のホテルを利用しているという点で、すでに近代の社会的条件の下で行われたのだが、より重要なのは、仏像や建築の鑑賞が「自由な想像力の飛翔」³⁸⁾に基づくことである。

「自由な想像力の飛翔」とはどういうことなのだろうか。まずこの旅行の趣旨について次の指摘に注目したい。

「実をいうと古美術の研究といふ事が自分にとってわき道だと思はれるのだ。今度の旅行も、古美術の力を享受することによって、自分の心を洗ひ、そうして富まさう、というに過ぎぬのだ。もとより鑑賞のためには幾何かの研究も必要であり、また古美術の優れた美しさを同胞に傳へるために論文を書くといふことも意味のないことではない。僕はその仕事を耻づべき事とは思はない。しかしそれは自分の中心の要求を満足させる仕事であるかどうか。自分の興味は確かに燃えてゐる。しかしその興味は眞実に美術の研究を目指してゐるかどうか。自分の表現欲は古美術から受けた印象を語らしめずには措かない。しかしその表現欲は眞実に古美術の美しさの紹介で満足するものかどうか。僕は自分が安逸を求めて自分の要求を誤魔化してゐるといふ印象から脱れる事が出来ない」³⁹⁾。

当時30才の若者の迷いを表白している箇所だが、この旅行の趣旨が、古美術の研究や、「古美術の優れた美しさを同胞に傳へるために論文を

書く」(改版では「論文」は「印象記」に変えられている。) ことにあるのではなく、研究や論文が書かれるとしても、「古美術から受けた印象」を語ろうとする「表現欲」に基づくものであるのだから、あくまで「自分の心を洗ひ、そうして富まさう」、言い替えれば教養⁴⁰⁾を高めることが旅行の趣旨なのである。このような立場からは、仏像は宗教的な偶像ではなく、あくまで美術作品なのである。

「僕が巡禮しようとするのは古美術に對してゝであつて、衆生救済の御佛に對してゝはない。もし僕が佛教に刺衝せられて起つた文化に對する興味から、「佛を禮する」心持ちになつた、などゝ云つたならば、それこそ空言だ。たとへ僕が或佛像の前で、心底から頭を下げたい心持ちになつたり、慈悲の光に打たれてしみべへと涙ぐんだりしたとしても、それは恐らく佛教の精神を生かした美術の力にまゐつたのであつて、宗教的に佛に帰依したといふものではなからう。宗教的に切り切るには、僕にはまだへへ超感覺的への要求が弱過ぎる」⁴¹⁾。

「自由な想像力」とは、この場合、印象を表現する力であるが、それには対象を美術作品として純化する力に基づいている。対象のもつ美術作品以外の要素は捨棄されねばならない。「自由な想像力」によって仏像も伎楽面も寺院建築もその宗教的意味を剝奪されるのである。日本の歴史に関する知識や世界の文化交流に関する知識は、この想像力の自由な飛翔のために動員される。「自由な想像力」は『古寺巡礼』の場合には、推古から天平にかけての時代のギリシア美術東漸など国際的文化交流の具体的姿を「空想」することに結実している。

後に亀井勝一郎はこのような和辻の仏像鑑賞

に対して「仏像は語るべきものでなく、拝むものだ」と不快感を示すことになる。

「私は古美術の専門家ではない。当然語らねばならぬ多くの伽藍や古仏にふれてない。様式等に関しても精密ではない。そういう研究書なら他にいくらもあると思った。私は古寺を巡りながら、そういう研究書を参考にしながらも反撥を感じたのであった。仏像を語るということは、古來わが国にはなかった現象である。仏像は語るべきものでなく、拝むものだ。常識にはちがいないが、私はこの常識を第一義の道と信じ、ささやかながら発心の至情を以てまた旅人ののびやかな心において、古寺古仏に対したいと思ったのである」⁴²⁾。

また後に保田與重郎も、「『古寺巡禮』式に、おのれの美文を作るために、感傷的に偶像を見る」⁴³⁾ 態度を幾度も⁴⁴⁾ 手厳しく批判するが、保田の批判から、逆に和辻の為したことの特徴が浮かび上がってくる。

「古代の作品に封しては、つくつた人がなした努力を尊び、またその念願のほどを思ひ、自分自身は倍の努力を注がねば、少しの理解すら得られぬといふことを、つゝましくさとらねばならぬ。…軽々しい気分的感傷的観賞による、美術趣味や古寺巡禮が流行し、浮華々々した美術寫真書の流行してゐる現象に、私は文明の空白化をまざまざと見るのである」⁴⁵⁾。

ここでの『古寺巡礼』に対する保田の批判の要点は次のようなものである。「自称文化人」や「インテリ」は、「伝統のくらし」への無知とコンプレックスから、我が国の古典、美術、彫刻を「全く異國のもののごとくに」あるいは

「無国籍のもの」として取り扱い、「異國人の遺品を味ふやうに、奈良の佛像を見て廻る」しかないのである。彼らの関心は、「すなほであたりまへの庶民」の生活を理解することではなく、「鑑賞の美文をつくり」あげることにあるのだが、その底には「一種の特権者的意識」がある。だから、底の浅さのために「古人の作品に對して輝くばかりよいことをいふ人が、とき／＼あつても、それは美術観賞や藝術學あるひは文藝學として體系づかない」のである⁴⁶⁾。

保田が批判している「軽々しい気分的感傷的観賞」は宗教的伝統にのみ向けられる訳ではない。見られるものをその文脈から切り離して「異國のもの」のように、「無国籍のもの」のように見なすという視角は、すべてのものに向けられ得る。和辻が友人木下空太郎の方法として理解したものは、和辻自身にも妥当するものであろう。

「木下はこれらの物象を描くに当たって、その物象の「美しさ」以外に何ものにも囚われない心を示している。彼は色道修行者のように女の享楽を焦点として国々を見て歩くのではない。また彼は美術史家のように、ただ古美術の遺品をのみ目ざして旅行するのでもない。彼は美しいものには何ものにも直ちに心を開く自由な旅行者として、たとえば異郷の舗道、停車場の物売り場、肉饅頭、焙鶏、星影、蜜柑、車中の外国人、楡の疎林、平遠蒼茫たる地面、遠山、その陰の淡董色、日を受けた面の淡薔薇色、というふうには、自分に与えられたあらゆる物象に対して偏執なく愛を投げ掛ける。その愛が駱駝の隊商にも向かえば、^{メイランファン}梅蘭芳にも向かい、陶器にも向かえば、仏像にも向かう。特に色彩と輪郭と音響とは、彼から敏感な注意をうける」⁴⁷⁾。

以上の比較から、「自分の心を洗ひ、そうして富まさう」という真の意味での教養形成の旅が、「古代の作品に封しては、つくつた人がなした努力を尊び、またその念願のほどを思ひ、自分自身は倍の努力を注がねば、少しの理解すら得られぬといふことを、つゝましくさと」ることとの大きな落差を生みだし、「美しいものには何ものにも直ちに心を開く自由な旅行者」と「すなほであたりまへの庶民」に寄り添う姿勢とは容易には両立しがたいことが理解できる。

こうした落差や分岐は、「知識人」や「教養人」がきわめて少数であったという時代的な状況には基本的に関わりがない。むしろ「旅行」という行為そのものによって必然的に伴うものである。なぜなら、「旅行」という行為は、たとえ想像上のものであっても、三木が指摘するように、「習慣的になった生活形式から脱け出ること」を本質的に含んでおり、この点で日常生活、とくに伝統的生活との矛盾、軋轢を引き起こす可能性を必然的に含むからである。

4. 「遊覧本意」と知の交流

文人的な、脱世俗的な旅とは異なる大衆的な「趣味の旅」では、旅行することと日常生活との間には何かしらの結びつきが生まれることになるが、この結びつきは説明を要するものであった。なぜなら、旅行が日常化したとしても、旅行そのものは「非日常的」であらざるを得ないからである。これまで、旅行と日常生活との関係をめぐる代表的な議論を取り上げて、この関係が近代生活全体の理解の仕方と密接に関わっていることを確認してきた。権田保之助においては、旅行は「現代に於ける勤労と生活

とを組織する機構の圧力」の破壊的影響から都市生活者の心身を擁護する娯楽のうちに位置づけられ、三木清においては、旅行は日常生活を離れる想像力の所産であり、そのことによって日常生活のすべてを新しい視角から再発見する可能性を拓くものであり、和辻は旅行における伝統から離れた「自由な想像力の飛翔」の一つの典型を作り上げた。

柳田國男の著作にはしばしば、一般的になりつつあった現代の観光旅行についての批判的指摘と「旅行」の望ましい在り方についての言及が見られる⁴⁸⁾。

冒頭にあげたブーアスティンの「観光」批判は1960年代初めのアメリカのものであるが、柳田國男も昭和初期の日本の現状を踏まえて同様の問題意識を持っていたことはよく知られている。1927年（昭和2年）の「旅行の進歩および退歩」と題する講演で、「あらゆる人間の社会的行動と同様に、旅行もまただんだんに価値の高いものへ変形して行きえられるとともに、時としてはまた退歩することもあるから油断がならぬ⁴⁹⁾」とし、「旅を保養と考えるような贅沢な気風を廃止するか、もしくはぜんぜん彼輩と絶縁しなければ、我々はこの方面においてあらたによき文化を開拓しえぬのみならず、あるいはせつかくすでに獲たものをさえ失うことになりそうである⁵⁰⁾」と現代の観光旅行の傾向を批判している。

「遊覧本位」の団体旅行について、「汽車の中などはことに群の力を籍りて気が強くなり、普通故郷にある日にはあえてしがたいような我儘を続けている。何のことはない、移動する宴会のようなものが多くなった」。また「ひとり旅」についても、「できるだけ自宅と同じような生活をするを、交通の便だと解している者も

稀でなく、「寝たり本読んだり知らぬ間に来てしまったということが、いかにも満足に思われる人」が多くなり、その結果、「旅行は少なくともその目的と効果とにおいては、五十年前よりもずっと単純」⁵¹⁾になって、「自転車の出あるきに近いもの」⁵²⁾になってしまった。

また旅行者を誘導し迎える旅館側の対応も厳しく批判されている。

「旅行などとは言っても、大道のガソリン臭いところばかりを、少しずつあるくのが関の山で、他の多くは客引き的案内記に釣られて、神社仏閣日本三景などを見てまわっているのである。宿屋などもどうしたら東京風、大阪風に見えようかにみな苦心している。刺身さえ食べれば能事了れりと心得ている。刺身などは本来オキナマスとって、漁師の食う即席料理であった。氷につめて山中に入るようにはなったが、海から遠くなればうまくないにきまっている。ほかにはなんらの歓待の方法も知らぬ癖に、最も楽に示される土地の食物というがごとき興味ある問題は、わざわざ骨を折って旅客の注意から遮断しようとするのである」⁵³⁾。

このような現代旅行の批判の背景には、非常に簡潔ではあるが時期区分と対応した三つの旅行類型がある⁵⁴⁾。

つまり、第一は、近代以前の「ういものつらいもの」、辛抱と非常な努力が必要である労苦としての旅行類型であり、第二は、「旅行そのものの黄金時代」ないし「理想に近い時代」の旅行である。そして第三が、現代の旅行であり、「価値の高いものへ変形して行きえられるとともに、時としてはまた退歩することもある」というように本質的な矛盾を孕んでいる旅行である。

「最近の三四十年が旅行そのものの黄金時代、それもすこし大袈裟だがとにかくに理想に近い時代であった」という指摘だけをみれば、柳田の現代観光旅行批判は、田山花袋などが草鞋履きで山野街道を跋涉した明治中期から後期にかけての時期をモデルとして、現在をそれからの退歩と捉えることに基づいているのだが、しかし、現代の旅行における「目的と効果が単純化した」ととらえる柳田の旅行観の要点は、このようなノスタルジーのみではなく、むしろ現代の旅行が「進歩と退歩」という二つの可能性もっていることの指摘にある。

「柳田は、旅行＝娯楽という一般的な考え方に対してきわめて否定的であった」⁵⁵⁾ という訳ではない。「楽しみのために旅行をするようになったのは、まったく新文化のお蔭である」と指摘されたり、たとえ「遊覧旅行」であっても、「今までは籠居を甘んじていた人々が、こうして世間を知ったために損をしてもいいとすれば、これはとにかくに総国民の生活幸福の増進の中に、加算せらるべき一要項であったには相違ない」⁵⁶⁾ のであり、限定的だとはいえ、電信電話や汽車とならんで「国内の各地方を接近させる」⁵⁷⁾ ひとつの力であるとの指摘からは、現代の観光旅行に出かける庶民への深い共感を読み取るべきであり、社会観としても現代の観光旅行の積極的な側面が分析されているのである。

問題は、「国内の各地方を接近させる」そのような潜在力が顕在化するための条件はなにかということである。彼は第一の旅行類型とは異なった「漂泊者」の伝統に注目している。

柳田は、「日本の文化の次々の展開は、一部の風来坊に負うところ多しと言っても、決して誇張ではなかった」⁵⁸⁾ とし、行商人、ひじり、遊芸人、渡り職人などの漂泊者による文化伝播

の意義を重視している。しかし、放射線状に構成された鉄道網と幹線道路の拡充によって、中央のものは地方に容易に流入するが、地方から中央へ、さらに地方間での交流は困難になってしまった。

その結果として漂泊者が他地域の事情を知らせるといって「由緒ある我々の移動学校は墮落して、浮浪人はただ警察の取締りを要する悪漢の別名のごとくに」⁵⁹⁾ になってしまった。

また「街道は常に自動車の煙埃をもって霞むほどの往来があっても、脇道は知った顔しかあてないようになってしまった。たまたま来る他所者には、油断のならぬような用件ばかり多くて、異郷の事情を心静かに語る人もなく、またわが土地を外町人に語り得るまで、知って出て行く者もめったにはないのである」⁶⁰⁾。

「旅行の価値というものが、内からも外からも安っぽくなってしまった」⁶¹⁾ のは、この「旅行道の大きいなる衰退」⁶²⁾ 帰結なのである。

このように柳田は、旅行を地域間で行われる一種の情報循環過程として捉えており、現代の旅行が単純化したと言われるのは何より、「地方相互の知識交換」⁶³⁾ が機能不全を起こしているからなのである。「旅行の価値標準、旅行の第一義」⁶⁴⁾ は、まさに、地方の「生存の事情」ないし「常の日の常の事情」⁶⁵⁾ を知ることに他ならない。なぜならば、「人の難苦といひ煩悶」というものの大部分が、本来知るべかりしことを未だ知らず、また教うべくして教えざる人のあった結果」⁶⁶⁾ だからである。

観光、団体旅行はいわば「晴れ」の行動であり、これに対して日常生活の相互的な知識交換の為に必要なのは、「人が晴ではなしに相違うて話をするような機会」⁶⁷⁾ なのである⁶⁸⁾。観光のような非日常的な行動によって得

られるのは、祭礼など非日常的で特別な事柄についての知に傾斜するのであり、逆に、日常生活事情についての知は、日常的な行動によってこそ得られ易い。

こうして柳田は一方では、庶民の楽しみの一つとしての旅行の意義を尊重しつつ、他方では、その問題性を二つの面からとらえている。第一に、旅行の安楽さを追求した結果、旅行の実質が都市生活と同じものになる傾向にあることである。非日常的であるべき旅行がモダン・ライフの日常性に飲み込まれつつあるという問題性である。第二に、旅行が果たしていた地域情報の流通という機能は、中央からの一方的情報流通に取って代わられつつある。

こうした問題意識から、彼は非日常的行為としての旅行を再び日常生活にいわば「埋め戻す」ことを指向するのである。「日常的な行動としての旅行」の復権を主張するのであり、「人が晴ではなしに相違うて話をするような機会」こそ、柳田の旅行の望ましい姿だった。

まとめ

大正から昭和前期にかけての旅行論から、旅行と現代社会との関係について考え方の分岐をたどり、機能的な考え方と人文的な考え方との分岐、また後者での、「自由・浮遊性」と「文脈性・拘束性」との分岐を見てきた。

特に「自由な想像力」と「伝統的な日常生活」との乖離は容易に解消できるものではなく、むしろ現代の旅行の基本的な矛盾であり、かつ、旅行文化を発展させる原動力となっているのではないだろうか。そしてまたひとたび達成された「自由な想像力」を「埋め戻す」ことは大きな犠牲なしには困難であろう。いずれにせよ、

自由な視線と日常生活の手触りとが和解できる一瞬があるとしたら、それは次のようなものであろう。

「旅行の盛んな時代には精神の盛んな活動があった。いつの時代にも、遠方の地へ旅行し、めずらしいものを見ることによって、人間は想像力を刺激された。彼らは驚きと喜びを発見し、自分の町の生活が、将来も今までと同じようにつづく必要はないのだと考えるようになった」⁶⁹⁾。

凡例 引用文中の […] は引用者による省略を、[/] は改行を示している。また旧字旧仮名遣い文の引用に当たって、適宜新字新仮名遣いに改めた場合がある。

注

- 1) Daniel J. Boorstin; *The Image A Guide to Pseudo-Events in America*, Vintage Books, 1992 (Atheneum edition 1962), p. 79. D.J. ブーアスティン『幻影の時代—マスコミが製造する事実』(星野郁美, 後藤和彦訳) 東京創元社現代社会科学叢書, 1974年, 91ページ。訳文は一部変更した場合がある。
- 2) 佐々木土師二『旅行者行動の心理学』関西大学出版部, 2000年, 第6章, 第7章参照。
- 3) 青木槐三『国鉄繁昌記』交通協力会, 1952年, 267ページ。
- 4) 1931年(昭和6年)に社団法人日本温泉協会に変更, 雑誌『温泉』発行。
- 5) 青木槐三・山中忠雄『国鉄興隆時代—木下運輸二十年—』日本交通協会, 昭和32年, 281ページ。
- 6) 財団法人日本交通公社社史編纂室編『日本交通公社七十年史』株式会社日本交通公社発行, 昭和五十七年, 66ページ。
- 7) 澤壽次, 瀬沼茂樹著『旅行100年—駕籠から新幹線まで—』日本交通公社, 1968年, 186ページ以降。
- 8) 次の文献も同様である。山本鉦太郎「大正～昭和期のガイド・ブック」『人はなぜ旅をするのか 第九巻 陸海空“旅行”の時代』日本交通公社出版事業局, 1982年, 92-98ページ。「明治末から大正初期にかけては、旅の本といえば山水ものがかなり流行った。山水とは自然の風景という意味で、旅の著書によく使われた。…花鳥風月をめぐる山水が中心の旅の本も、大正中ごろから昭和のはじめにかけて趣味の旅をテーマの本がそろそろ出はじめた。旅をする人すべてが美しい風景だけを求めているわけではなく、古寺巡礼, 味覚探求, 温泉めぐりなどさまざまな目的があるわけだ。」92ページ。
- 9) 例えば, 松川二郎『科学より見たる趣味の旅行』有精堂, 大正15年。
- 10) 山本鉦太郎「大正～昭和期のガイド・ブック」『人はなぜ旅をするのか 第九巻 陸海空“旅行”の時代』日本交通公社出版事業局, 1982年, 94ページ。
- 11) 松川二郎『珍味を求めて舌が旅をする』日本評論社, 大正13年, 2-3ページ。
- 12) 「新民謡運動」については, 筒井清忠『西條八十』中央公論新社, 2005年, 第六章を参照。
- 13) 駅にスタンプが設置されるようになった経過については, 近藤東は「駅名スタンプに就いて」(『観光美術』観光美術協会, 1940年(昭和15年)2月中旬号, 40ページ)で、「驛名スタンプの蒐集の流行は、昭和八、九年頃を最高とし、…驛名スタンプの最初は、福井だと聞いてゐる。今、その文献を探したが見當らなかつた」としているが、富永貫一は「芽ばえ行く驛のスタンプ」(『ツーリスト』1932年(昭和7年)11月号)で、福井駅が巡礼の朱印帳にヒントを得て1931年(昭和6年)5月5日より開始したとしている。
- 14) 日本旅行文化協会の創立については, 拙論「旅行の近代化と「指導機関」—大正・昭和初期の雑誌『旅』から—」立命館大学産業社会学会編『立命館産業社会学論集』第44巻1号, 2008年6月を参照。
- 15) 例えば, 1924年(大正13年)10月号三好善一「旅行小論」, 1925年(大正14年)2月号, (2巻

- 2号) 田山花袋「昔の旅について」
- 16) 『旅』1926年(大正15年)4月号,(3巻4号)扉:休息・解放・旅行,1ページ。
- 17) 『旅』1928年(昭和3年)7月号,(5巻7号)「旅」について 伊福部隆輝,2ページ。
- 18) 『旅』1928年(昭和3年)1月号,(5巻1号)「旅にあこがれる 生活更新の泉として」芳賀融,60ページ。
- 19) 『旅』1930年(昭和5年)8月号,扉,佐藤正雄,1ページ。
- 20) 『旅』1934年(昭和9年)1月号,(11巻1号)「旅行を礼讃す」鐵道次官 久保田敬一,6ページ。
- 21) 『旅』1934年(昭和9年)11月号,62-63ページ,および西川義方「旅行禮讃」
- 22) 『旅』1941年(昭和16年)4月号,2-5ページ。この論考は,大和書房刊の著作集には収録されていない。
- 23) 前掲誌3ページ。
- 24) 前掲誌4ページ。
- 25) なお,このような変化は権田自身の研究についても妥当する。つまり,初期の「民衆娯楽」研究において,旅行はほとんど射程に入っていないが,昭和10年代の「国民娯楽」研究においては明確に「新興娯楽」として位置づけられるようになる。例えば1941年(昭和16年)の『国民娯楽の問題』では次のように述べられている。「国民大衆の生活を創り出す抑々の原因の一つであった交通機関の発達そのものが,已に新しい娯楽の種類を創り出している。それは旅行趣味の娯楽化である。鉄道省をはじめ,市電,郊外電鉄,遊覧バス,遊覧船が旅行遊山の趣味の範囲を拡大すると同時に,その享楽者の範囲をも著しく拡大した。ハイキング,キャンプ,ロッククライミング,スキー,スケート等々が性別を超越し,年齢別を無視し,職業階級別を度外視して広く愛好の的となっている。」(権田保之助著作集,第三巻,23ページ。その他,164ページ,178ページなど。)
- 26) 権田は1942『ナチス厚生団』を出版している。
- 27) 権田保之助著作集,第三巻,109ページ。
- 28) 前掲同書,110ページ。
- 29) 前掲同書,110ページ。
- 30) 前掲同書,110ページ。
- 31) 『民衆娯楽論』巖松堂書店,1931年,100ページ。
- 32) 生田春月「旅の心」『旅』1926年(大正15年)10月号,(3巻10号),2-3ページ。
- 33) 『三木清全集第一巻』岩波書店,1966年,343-344ページ。
- 34) 前掲同書,344-345ページ。
- 35) 前掲同書,346ページ。
- 36) 『古寺巡礼』改版序「この書がかつてつとめたような手引きの役目は,もう必要がなくなっている」岩波文庫,6-7ページ。
- 37) 以下の論文を参照。根来司「『古寺巡礼』の成立—文体と語彙—」『国語語彙史の研究』(和泉書院刊)第十集,1989年12月9日発行,所収。中島国彦「古寺巡礼の季節」『早稲田文学』『近代文学にみる感受性』29章,筑摩書房,1994年。浅田隆,和田博文編『古代の幻—日本近代文学の“奈良”』世界思想社,2001年。中島国彦「『古寺巡礼』と『大和路・信濃路』をつなぐもの—堀辰雄「大和路」ノートの検証を中心に—」『日本近代文学』第72集,2005年。荻部直「和辻哲郎の「古代」—『古寺巡礼』を中心に—」『日本近代文学』第72集,2005年,177-189ページ。
- 38) 『古寺巡礼』改版序「この書の取り柄が若い情熱にあるとすれば,それは幼稚であることと不可分である。幼稚であったからこそあのころはあのような空想にふけることができたのである。今はどれほど努力してみたところで,あのころのような自由な想像力の飛翔にめぐまれることはない。そう考えると,三十年前に古美術から受けた深い感銘や,それに刺戟されたさまざまな関心は,そのまま大切に保存しなくてはならないということになる。『古寺巡礼』岩波文庫,7ページ。和辻自身がこの本の普遍的な長所を「自由な想像力の飛翔」「空想」若さ故の想像力に認めていたことは興味深い。
- 39) 『古寺巡礼』初版16-17ページ。
- 40) 教養の意味については次の箇所を参照。「青春の時期に最も努むべきことは,日常生活に自然に存在しているのでないいろいろな刺激を自

- 分に与えて、内に萌えいでた精神的な芽を培養しなくてはならない、という所に集まって来るのです。／これがいわゆる「一般教養」の意味です。数千年来人類が築いて来た多くの精神的な宝、芸術、哲学、宗教、歴史によって、自らを教養する、そこに一切の芽の培養があります。「貴い心情」はかくして得られるのです。全的に生きる生活の力強さはそこから生まれるのです。「すべての芽を培え」講談社文芸文庫『偶像再興・面とペルソナ 和辻哲郎感想集』2007年、185-186ページ。
- 41) 『古寺巡礼』初版、36ページ。
- 42) 亀井勝一郎『大和古寺風物詩』改訂版、1953年(昭和28年)新潮文庫のあとがき 206ページ。
- 43) 保田與重郎『保田與重郎文庫(17) 長谷寺・山ノ辺の道・京あない・奈良てびき』新学社、2001年。(1965 S40) 20ページ。
- 44) 和田博文「保田與重郎―「大和は国のまほろば」―」浅田隆 和田博文編『古代の幻 日本近代文学の〈奈良〉』世界思想社、2001年、所収、参照。
- 45) 保田與重郎『保田與重郎文庫(17) 長谷寺・山ノ辺の道・京あない・奈良てびき』新学社、2001年。(1965 S40) 21ページ。
- 46) 前掲同書、21-27ページ。
- 47) 和辻哲郎「享楽人」(講談社文芸文庫『偶像再興・面とペルソナ 和辻哲郎感想集』2007年(1921年)、253-254ページ。)
- 48) 柳田國男の研究においても、「旅行」は注目されてきた。例えば、宮本常一「柳田國男の旅」『新文芸読本柳田國男』河出書房新社、1992年、所収。後藤総一郎監修 柳田國男研究会編著『柳田國男伝』三一書房、1988年、第七章 旅と学問。
- 49) 柳田國男『青年と学問』岩波文庫、1976年、45ページ。
- 50) 同上、57ページ。
- 51) 柳田國男『明治大正史世相編』『柳田國男全集 第26巻』ちくま文庫、189ページ。
- 52) 前掲同書、188ページ。
- 53) 柳田國男「旅行の進歩および退歩」『青年と学問』岩波文庫、1976年、所収(1927年、昭和2年)、57ページ。)
- 54) 後藤総一郎監修 柳田國男研究会編著『柳田國男伝』三一書房、1988年、「第七章 旅と学問」でも「ユニークな三つの段階」を指摘している。516ページ。なお、白幡洋三郎著『旅行のスズメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』中公新書、1996年、のように、柳田の所論において「旅」と「旅行」が概念的に区別されているという解釈もあるが、そのような傾向はあるにしても一貫しているとは言い難いので、本論ではその解釈は採用しないことにする。
- 55) 後藤総一郎監修柳田國男研究会編著『柳田國男伝』三一書房、1988年、520ページ。
- 56) 柳田國男『明治大正史世相編』、188ページ。
- 57) 前掲同書、191ページ。
- 58) 前掲同書、199ページ。
- 59) 前掲同書、199ページ。
- 60) 前掲同書、202-203ページ。
- 61) 前掲同書、199ページ。
- 62) 前掲同書、203ページ
- 63) 前掲同書、200ページ。
- 64) 柳田國男「旅行の進歩および退歩」『青年と学問』岩波文庫、1976年、所収。(1927年、昭和2年)、51ページ。
- 65) 前掲同書、53ページ
- 66) 前掲同書、52ページ。
- 67) 柳田國男『明治大正史世相編』『柳田國男全集 第26巻』ちくま文庫、203ページ。
- 68) この延長上にあるのが「旅行組合」という一種の協同組合の構想であった。柳田國男「旅行の進歩および退歩」『青年と学問』岩波文庫、1976年、57ページ。
- 69) Daniel J. Boorstin; The Image A Guide to Pseudo-Events in America, Vintage Books, 1992 (Atheneum edition 1962), p. 78. D.J. プーアスティン『幻影の時代―マスコミが製造する事実』(星野郁美、後藤和彦訳) 東京創元社現代社会科学叢書、1974年、90ページ。

“Taste based Travel” and “Modern Life”:
The development of tourism as culture and arguments
on traveling in the period of Taisho through early Showa

AKAI Shoji *

Abstract: This study aims to reveal how the activity of “traveling” had been perceived by people and identify what problems and cultural possibilities were brought about by popularized tourism. To this end, this paper provides an overview of the tourism that was diversified and popularized in Japan during the Taisho period through early Showa period, and analyzes representative papers on the effects and cultural significance of traveling in this context. First, analysis is carried out on various types and patterns of “taste based travel” although the popularization and diversification of traveling are inseparable. Second, consideration is given to the effects and social functions of traveling, using Yasunosuke Gonda’s arguments as a reference. Thirdly, the positioning of traveling as a utopian experience, which was put forth by Kiyoshi Miki, is examined, and Tetsuro Watsuji’s journey to the ancient capital Nara is taken up as a typical example of this sort of traveling. Fourthly, consideration is given to the cultural potential tourism has as a popular amusement, by focusing on Kunio Yanagita’s ambiguous awareness of popular tourism.

Keywords: Taste based Travel, Yasunosuke Gonda, Kiyoshi Miki, Tetsuro Watsuji, Kunio Yanagita

*Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University